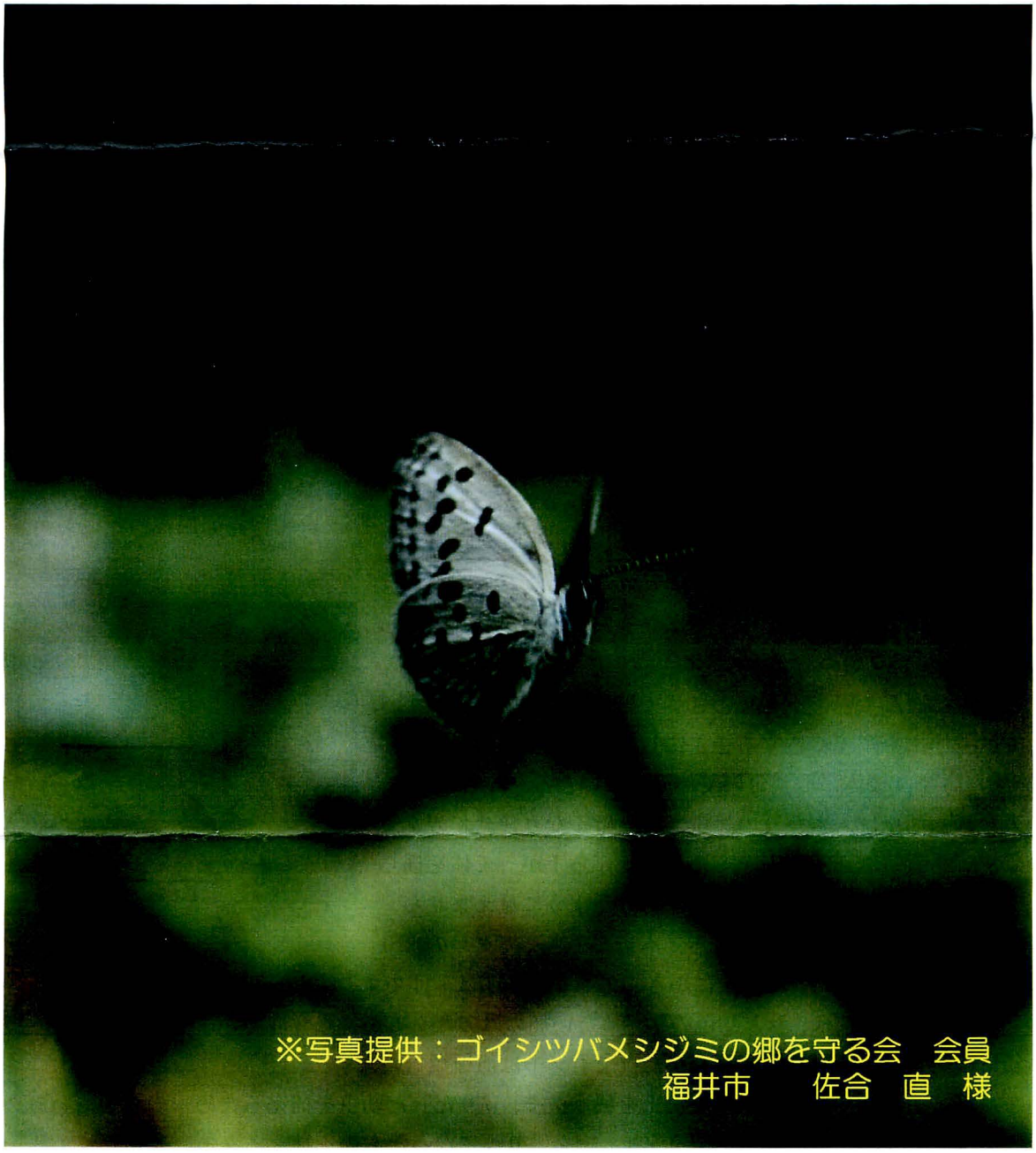
会報第3号　　2015年6月30日発行

ゴイシツバメシジミの郷を守る会　会報

ゴイシツバメシジミの郷



※写真提供：ゴイシツバメシジミの郷を守る会　会員
福井市　　佐合　直　様

ゴイシツバメシジミの郷を守る会　事務局
〒868-0701
熊本県球磨郡水上村岩野2678　岩野公民館内
電話：0966-44-0333　ＦＡＸ：0966-44-0329

今回は、当会会員の一人：野田英敏さんから寄稿していただきました。野田さんは、昔はたくさん見ることができたオオムラサキが再び故郷で舞うことを願い、オオムラサキの大量飼育に取り組まれています。大量飼育が成功されるまでにはさまざまな苦労があったようですが、今は飼育施設でたくさんのオオムラサキが飛び廻っています。今号と次号の二回に分けて「野田さんの挑戦」を記載します。今号は、飼育が思ったようにいかなかった苦労話です。

日本の国蝶　オオムラサキに魅せられて　前編

ゴイシツバメシジミの郷を守る会　副会長　野田　英敏

今、雨が降っています。３月１５日、オオムラサキを飼育しているハウス（５ｍ×１２ｍ）の中に座っています。小さい雨の音と、ときより風の音が聞こえるだけで静かです。ハウスの中には１０本の榎と、根元には榎の枯れ葉を盛ってあります。この中に幼虫が眠っています。そろそろ目覚め、新芽を求め木登りが始まるころです。これからオオムラサキを育てる楽しみ、また苦労の始まり始まりです。

私がオオムラサキの飼育を始めたのは、平成９年でした。オオムラサキを飼育し、放蝶したら自然に育ち、たくさんのオオムラサキが湯前町の空を飛び、見ることができるようになる、子ども達が網を持って追っかける、湯前に親子で来てくれるようになる、観光にも結び付く、と思っての飼育の始まりでした。それがこんなに長くかかるとは思ってもみませんでした。飼育がこんなに難しいものとも思ってもいませんでした。一年一年天候等違いもありますが、いろんなことが起き、失敗また失敗の連続でした。失敗の原因としてはいろいろあげられますが、まずは天敵のお話しです。

野田さんの飼育ハウス

幼虫が冬眠を終え、新芽を求めて木に登り始めるのが２月末から３月初めですが、登り始めるとそれを待ち受けているクモがいます。木の節々の陰に潜んでいます。ちいさくて黒っぽい丸いクモです。このクモは、幼虫を糸でぐるぐる巻きにして体液を吸いとります。また、糸をださず直接体に取り付いて体液を吸いとるクモもいます。体液を吸われた幼虫は、木登りの途中で黒っぽくなり痩せて死んでしまいます。ある時は、木から糸をたらし、ぶら下がって体を揺らしている幼虫を見ましたが、他には何にもいるように見えません。それで白紙の上に幼虫を置いたところ、本当に小さくてダニのようなクモが体から離れました。こんなに小さくてもクモ一匹は一匹です。幼虫一匹を確実に取ります。やっと新芽にたどりついた幼虫には、みどり色の平べったい顎のはったクモが待ちうけています。葉から葉へと移動しながら幼虫を捕食します。ハウスのなかだけでもクモは何種類もいます。

オオムラサキ♂

地面を這ってまわり冬眠からさめた幼虫を襲うクモ、登りだした幼虫を捕えるため木の途中にいるクモ、登って緑の葉っぱを食べている幼虫を襲うクモ、網を張り蝶になったものを捕えるクモ、また本来は網を張るクモだけれども、どういうわけか張らずに木の枝を動き回り幼虫を襲うクモ等何種類ものクモが待ち受けています。そういったクモの被害にあって、大半の幼虫はいなくなってしまいます。クモから逃れ、やっと大きくなった幼虫を、今度は蜂が襲います。ハウスの隙間から入って、幼虫を後ろから襲い肉団子にして持って行ってしまいます。幼虫は、なにもすることもできず緑っぽい液が出て（後では黒っぽくなる）襲われるままです。蜂は、一度来ると何度もやってきて幼虫を肉団子にして持っていきます。

こういうこともありました。葉の裏でさなぎになったものが、体の半分をかじられ黒い液体で固まっています。かじられた部分は修復して中身はまだ生きています。ハチだろうか？　鳥だろうか？　鳥はハウスには入れないはずだが・・ということで、何による被害かわかりませんでした。次の日も次の日も何個かさなぎがかじられ黒い血を流しています。木の根元をかき分けて、何かいないか探したりしましたがどうしてもわかりませんでした。夜に何かいるのか？　それで夜に懐中電灯をもって見回りに行きました。すると木の上で何かが光っています。よくよく見るとムカデの目でした。ムカデはその時、それはそれは美味しそうにさなぎをかじって食べているところでした。

まるまる太った終齢幼虫

また、苦労をするのが天敵とまでいかないけれども、毎年エノキワタフキアブラムシには悩まされます。繁殖力がすさまじく、あっという間に増殖します。榎の葉裏を吸うのですが、葉の表面に甘い汁が出て、それに黒いカビがつき、幼虫の餌としての葉が激減します。これには大変悩まされました。ワタフキが出ると、かならず蟻が上がってきます。蟻が幼虫を襲うこともあります。蟻も初めのうちは巣穴があり、薬などで殺すことができましたが、だんだんと巣をつくらなくなり、板の裏などに固まって過ごしていることが多く、なかなか殲滅できません。木の根元から登ってくるだけでなく、天井の方から紐を伝っておりてきたり、風で葉っぱが網についた瞬間に葉に移ったりと、サーカスの空中ブランコ並みの曲芸でやってきて幼虫を持っていったりします。蟻の害は、卵から幼虫になったばかりのときの被害が多くなります。

ワタフキ退治には、農薬を使うけにはいかず、牛乳をかければいいと聞けば早速試しますが効果はありません。ニンニクもそうです。ある時は、動力噴霧器で吹き飛ばし、網の目からさらに外に出るように強く吹きだしておりました。ふと外の網の下を見ると、土かえるが３～４０匹きれいに横にならんでいます。何が起きたのかと一瞬思いましたが、吹き飛ばしたワタフキが上から落ちてくるのを並んで食べているところでした。圧巻でした。あの光景を見たくてその後も何度かしましたが、それっきりでした。これもワタフキ退治にはならず、１葉１葉、歯ブラシでこすりとったり、手でつぶしたりしましたがワタフキの繁殖力には到底かないません。ある時、天敵利用としてテントウ虫が良いと聞き、ナナホシテントウを入れてみました。その時は元気に動き回りアブラムシを見つけ目の前で一匹食べました。これはいいと思ったのですが、それで終わりです。満腹したのか、全く動きません。アブラムシの方から口元にやってきても食べません。これではダメだとあきらめていましたが、ナナホシではなくテントウ虫の中のナミテントウ虫、ヒメカメノコという小さなテントウ虫の方がよく食べてくれて、今の時期にはセイタカアワダチソウの花にいるということを聞き、網を持って捕えに行きましが、このテントウ虫は動きが速く人影を見たらすぐに地面に落ち身を隠したり、飛び立ったりでいなくなってしまいます。網で捕えても、それを手でつかもうとすると飛び立ち逃げられます。いまでは、ペットボトルを半分に切って、切った上の方を逆さに入れて、テントウ虫が入ったら出られないような捕え器をセイタカアワダチソウの花の下にもっていき、花をゆすって落ちてきたのを捕えています。この小さいテントウ虫は、ギャル曽根なみに次から次にワタフキを食べます。だいぶこれでワタフキは少なくなりますが、絶滅、全滅はさせないようです。今では、捕えてこなくてもハウスの中で繁殖しており、ほどほどの共存共栄でやっています。

虻もハウスの中に入ってきます。アブラムシを食べてくれると聞き全く気にしていませんでしたが、ある時黒っぽい虫（後で調べてわかったのですがヒラタアブの幼虫）とオオムラサキの幼虫が頭と頭を合わせ押し合っているようでした。何をしているのかと思いその様子を写真で撮っておりましたら、なんと、オオムラサキの幼虫の頭をかじり始め、後では頭を食べてしまいました。虻はいいけど、アブの幼虫は危険なのが分かりました。

またある年沢山の幼虫が大きくなりました。ハウス内のエノキの葉っぱは、すべてが筋状に食べられ丸坊主

になった時があります。1回で幼虫を５０匹ほど腕にのせ、5回で２５０匹を、外の一本のエノキに移し終え、傍で休憩をしていると、鳥が騒ぎ始めました。ちらちらっと周りの木に鳥が飛んできます。少し離れるともう駄目です。幼虫をくわえて飛んでいきます。鳥も子育ての最中なのでしょうか。何匹も何回もやってきて幼虫を持って行ってしまいます。次の日には一匹が残されているだけでした。それも黒い血をながして。それもその日の内に持っていかれました。さらに、次の日２５０匹をまた移動しましたが、今度はまたたく間に持って行ってしまいました。

今度は違うエノキに網の袋をかけ幼虫を放しました。これなら大丈夫と安心したのも、つかの間でした。群がって外からつつき、幼虫は大半が血を流しています。また中には隙間から入り込み幼虫を持っていきます。何匹か鳥も捕えましたが、鳥も子育てで必死なんでしょう。食物連鎖といいますが、自然界での普段食べる餌が不足しているでしょうか？　雛を育てるために必死なのでしょうか？　幼虫を外に出したとたん見つけ出し完全に持って行ってしまいます。今年は木の芽の出が少なく多くの枝が枯れています。今年もハウス外のエノキに移さなければならないようです。この状態では、育つのは、100頭くらいで放蝶は無理かなと思っています。

こういった難関を乗り越え蝶になるわけですが、成虫になってもさらに難題が待ち受けていました。オスが生まれます。その後１０日ほどでメスが生まれますが、餌がうまくいかずオスが死んだ後にメスが生まれてその時は交尾できずに死んでしまいます。何年かこういった状況でしたがスポーツ飲料、乳酸菌、焼酎、酢および蜂蜜等を与えたところ格段に良くなりました。ただ当初は、餌の味を覚えさせるため、竿のうえに包帯を巻きそれに餌をしみこませ蝶の眼の前に差し出し、それに乗ったところで餌場までつれてくるということを何度も繰り返し、餌と餌場を教え込みました。今では教え込まなくても、餌場に集まるようになり、樹液を吸うように餌を吸い飛び回っています。

野田さんオリジナルのエサにきたオオムラサキ

また、ハンドペアリングをしておりましたが、羽を折ることが多くせっかく育った蝶を駄目にし、育てふやすことができませんでした。羽を接着剤で付けてみたり、添え木を添えたり、いろいろ考えましたが全部だめでした。羽を痛めた蝶を治療する何か方法はないのか今も考えています。

これらの難題を克服し、飼育から８年後やっと第一回目の放蝶会をすることができました。

次号に続く（次号：放蝶会、今後の取り組みなど）

2014年度の活動内容

2014年　6月：「ゴイシツバメシジミの郷を守る会」会報第２号　発行・送付

2014年　6月15日：「ゴイシツバメシジミの郷を守る会」第２回総会@市房観光ホテル

・午後２時より、役員会、総会、懇親会を行いました。

2014年　6月20日～8月20日：ゴイシツバメシジミ定点観測

・例年と同程度の個体数を確認することができました。

2014年　7月30日：ゴイシツバメシジミ分布調査@市房山

・新たな生息ポイントを確認することはできませんでした。

2014年　9月2日:葉芽刺しによるシシンラン増殖活動@市房観光ホテル

・　前年同様の方法でプランターにシシンランの葉芽挿しを行いました。

シシンラン葉芽挿しの様子

2015年1月26日：「ゴイシツバメシジミの郷を守る会」新年会＠市房観光ホテル

・2015年度の活動計画を話し合いました。

2015年2月16日：九州中央山地希少野生生物保護管理対策調査業務検討会

・ゴイシツバメシジミ保護のための九州森林管理局主催の会議が人吉で行われました。当会からも、顧問の三枝先生、杉本氏をはじめ、他3名が出席しました。

会員構成（2015年5月31日現在）

・個人正会員：１５名
・個人賛助会員：１５名
・法人会員：　１団体
・顧　　問：　４名　　・事務局：1名（水上村教育委員会教育課内）

お知らせ

会員募集

個人正会員、個人賛助会員、法人会員を大募集しております。それぞれの年会費は以下の通りです。

・個人正会員：2,000円（会の趣旨に賛同される個人、かつ会の活動に参加可能な方）
・個人賛助会員：2,000円（会の趣旨に賛同される個人。但し会の活動に参加するのが困難な方）
・法人会員：5,000円（会の趣旨に賛同される法人）

会員登録された方には、毎年発行する広報とゴイシツバメシジミ観察会へのご案内等、保護活動に関する情報をお知らせ致します。申し込み希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

2015年　ゴイシツバメシジミ観察会

水上村教育委員会主催の「ゴイシツバメシジミ観察会」が開催されます。案内は当会会員が行いますので、まだゴイシツバメシジミを見たことがない方は参加してみてはいかがでしょうか？

日　時：7月23日（木）　10時～12時
場　所：市房山キャンプ場（10時までに受け付けを終了してください）。
参加費：当会会員は無料。一般　500円。中学生以下　無料。

広報原稿大募集

広報に記載する原稿を、会員の皆さまから募集しております。ゴイシツバメシジミに関わらず、環境保全や市房山に関する記事でしたら何でも構いませんので是非ご投稿下さい。

後記

・今号は、当会副会長の野田さんに野田さんが長年取り組んでおられる「オオムラサキの飼育」について寄稿していただきました。野田さんの原点は、故郷でたくさんの自然に囲まれて遊んだ昆虫少年だった頃にあるとのことです。その頃は、たくさんのカブト虫やクワガタ、オオムラサキなどが見られたそうです。

・私も子供のころ水上村で虫を追いかけていましたが、最近めっきり少なくなったことを実感しています。村内の目にする景色は昔とあまり変わっていないように見えるのですが、人間活動が影響しているのでしょうか？　自然の中身が変わったのだと思います。ゴイシツバメシジミもこの人間活動の影響でその姿を消さないよう、今後も地道な努力を続けていきたいと思います。

・今年度は、観光協会の協力を得、「ゴイシツバメシジミ」というタイトルの水上村情報誌を発行する予定でおります。出来上がりましたら、会員の皆様に配布しますので楽しみにしていてください。

（第3種郵便物認可）

市房山に生息　希少チョウ「ゴイシツバメシジミ」

官民挙げた保護活動　軌道に

水上村の市房山に生息する国天然記念物のチョウ「ゴイシツバメシジミ」を積極的に保護し、地域活性化にも生かそうとの機運が地元で高まっている。住民らが幼虫の餌となる植物の増殖に取り組み、村は保護施設の整備へ準備を進めている。官民挙げた活動が軌道に乗り始めた。

幼虫の餌になるシシンランをプランターで育てている「ゴイシツバメシジミの郷を守る会」の会員＝水上村

官民挙げた保護活動が軌道に乗り始めたチョウ「ゴイシツバメシジミ」＝水上村の市房山（西和人さん提供）

「ゴイシ」は羽を広げた大きさが雄雌ともに2センチほどで、黒い斑点が碁石状に並んだ羽が特徴。照葉樹の原生林のみに生息し、現在国内では市房山キャンプ場一帯と山都町の内大臣峡の2カ所だけ。同山の生息数は推計で数十羽程度という。

1973年に日本で初めて同山で発見後、研究を続けている元日本昆虫学会会長の三枝豊平・九州大名誉教授（77）＝福岡市＝によると、かつては宮崎県側や奈良にも生息していたが、チョウマニアによる乱獲などで激減した。そのため人による保護活動は必要で、三枝名誉教授は「水上村は取り組みが熱心」と評価する。

住民　定点観察や幼虫の餌増殖

水上村　キャンプ場に施設整備へ

村民有志らは2年前、「ゴイシツバメシジミの郷を守る会」（西和人会長）を発足。現在は県内外の33人が加入し、会報の発行や同山での定点観察、分布調査のほか、幼虫の餌となるイワタバコ科の植物シシンランの増殖に取り組む。

昨夏の調査では、これまで未確認だった祓川上流で個体を確認する成果を上げた。西会長（52）は「観光振興や生物多様性の観点から保護は重要。いなくなったら寂しいし、村にとって大きな損失」と力を込める。

村も76年から生息地に監視小屋を設置するなどして、ほぼ毎年、チョウが飛び交う7、8月を中心に常時2人程度の監視員を配置してきた。村はまた、2016年度の完成を目指し、市房山キャンプ場内に保護増殖の拠点と村の自然資産である市房杉などを併せて紹介する施設を整備する予定だ。村は「生息地を守ることは地域活性化につながる」としている。

課題は、阿蘇地方などに生息する「オオルリシジミ」といった同じ希少種の中で知名度が低い点。今後、同会を中心に観察会を盛り込んだ自然体験型の観光プログラムなどを実施する計画で、西会長は「豊かな自然を肌で感じ、全国の大人から子どもまで楽しんでもらえる企画にしたい」と意気込む。

同会は、正会員や賛助会員などを募集している。正会員は定点観察といった現地活動に参加できる人が対象。個人は年会費2千円。村教育委員会☎0966（44）0333。

（内海正樹）

クローズアップ